

令和6年度 協働のまちづくり活動支援事業報告会を開催しました！

■開催の趣旨

市民と行政による協働のまちづくりを推進するため、NPO・市民活動団体等と市民の皆さんとの交流と地域コミュニティの再生や住民主体のまちづくりを考える機会として、市が採択した協働のまちづくり活動支援事業の成果発表となる令和6年度報告会を開催しました。

●日時：令和7年4月20日（日）午後1時00分～午後4時10分

●場所：市民交流施設ぷらっと交流サロン（江別市東野幌本町6番地43）

■報告団体

- | | |
|-----------------------|---------------|
| 【1】 特定非営利法人恩おくり | （該当ページ：1～4） |
| 【2】 こども支援ワーカーズ みんなのいえ | （該当ページ：4～6） |
| 【3】 特定非営利活動法人つながり | （該当ページ：6～8） |
| 【4】 えべつシェーネシュティンメン | （該当ページ：8～10） |
| 【5】 江別市女性団体協議会 | （該当ページ：11～12） |
| 【6】 子育て支援ワーカーズ きらきら | （該当ページ：12～15） |
| 【7】 江別市男女共同参画推進連絡協議会 | （該当ページ：15～16） |

■コメンテーター



（写真左から）

小内 純子 氏（札幌学院大学 名誉教授）

松山 和子 氏（江別市生涯学習推進協議会）

■各団体の事業報告及びコメンテーター・会場からの質疑等（概要）

【1】 NPO 法人恩おくり

事業名：食の支援拠点を広めよう！出張・協働フードパントリー実践&広報大作戦

【実施内容】

本事業は、前年度（令和5年度）に補助金を受けて実施した大麻扇町商店街拠点でのフードパントリーの経験をもとに、食品の受け渡しだけでなく、交流の場の必要性や、子ども食堂等の存在が広く知られていないこと、支援が市内全域に求められていることを受けて展開したものである。

令和6年度応募
事業の構成

チラシの制作と「まんまる新聞」への折り込み

チラシには出張フードパントリーの情報、食品募集、子ども食堂や関連活動団体の情報を掲載し、市内全域に配布した。

各拠点に出向いての食品配布 計5回実施

- | | |
|--------|------------------------------|
| 6月24日 | 「よりあい食堂（同法人の拠点 恩ちゃん家）」でモデル実施 |
| 8月28日 | 「真願寺（ゆかり食堂／株式会社ライズリング協力）」 |
| 10月19日 | 「てまりの華（てまり食堂）」 |
| 12月21日 | 「にここ広場」 |
| 2月9日 | 「あすかの森認定こども園」 |
- ※子ども食堂の開催が叶わず、園開放日での実施となった。

- ・食品配布

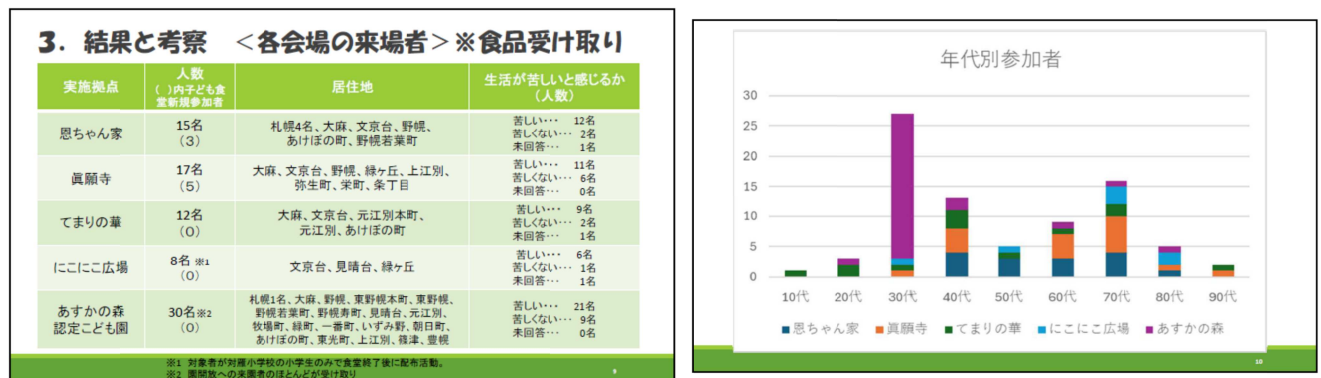
江別市社会福祉協議会「くらさぽ」相談員も同行し、必要に応じた支援につなげられるよう配慮

- ・配布した食品

お米 3 合を必ず含め、その他、乾麺、缶詰、お菓子等を組み合わせて 1 人 1 袋分とし、寄贈された食品を仕分け・袋詰めして配布。食品は、市内のスーパーで行っているフードドライブ（ホクレンショップ 3 店舗、イオン江別店、アークス大路店）やレバンガ北海道の試合会場等のフードドライブからの寄贈、個人からの寄贈により集めたもの。仕分け作業はボランティアや学生と行った。

【結果と考察】

チラシの効果は非常に大きく、市内幅広い拠点から来ていただいた。



アンケートも当日行い、生活が苦しいと答えた方が相対的に多く見えるが、苦しいと答えた人の状況までは精査出来ない。年代別には 30 代が多いが、これはあすかの森の園開放に来たお母様方が多いことでこのような結果になっている。これを抜くと高齢の方が多い。広報が届いたことで受け取り希望者だけでなく、寄付希望者からの連絡もあった。

配布の場では来場者との会話を重視し、特に複数拠点で顔を合わせた来場者とは継続的な関係性も築かれた。食品配布を契機に、「思ちゃん家」に来所した例や、「野幌にも子ども食堂を」という声も聞かれ、地域ニーズの可視化にもつながった。

チラシを見て電話で問い合わせをする例もあり、いつでも食品を受け取れると思い問合せた事例もあったが、その 7 件のうち 1 件は本人同意のもと「くらさぽ」につないだ。食品受け取りをきっかけに子ども食堂に参加した人数は少なかったが、今後の開催予定を案内し、次回以降の参加促進に努めた。

反省点としては、「にこにこ広場」が対雁小学校の児童限定、「あすかの森認定こども園」は園都合により子ども食堂開催日と一致しなかったため、事業の趣旨通りの実施とはならなかった点がある。今後は他団体との調整や理解促進に一層配慮する必要がある。

【収支決算】

- ・収入：220,046 円

内訳は自己資金、協働のまちづくり活動支援事業からの補助金、コープの助成金

- ・支出：メンバーの交通費、印刷製本費や折込代に充当

- ・収支の差額：1,512 円

【今後の展望と課題】

- ・展望：江別市内に歩いて行ける子ども食堂等の拠点を増やすこと
具体的には、子ども食堂未開設地域での新規開設支援や、運営補助を行うこと。
- ・課題：運営体制や活動基盤の整備

現状、法人の役員・会員全員が無報酬で活動しており、他機関からの相談件数の増加、ボランティアの希望も多く、ボランティア希望者への対応など、多くの業務が限界に近づいている。体制強化を進めていく必要がある。

◆質疑応答

Q：松山委員

活動が広がっている中で、昨年の課題であった「必要な人に食品が届いているか」という点に対する工夫はあったか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

特段新たな工夫はしていないが、「困っている人に」と表現すると本当に困っている人が来づらくなる懸念があるため、誰でも来られる場づくりを意識した。開催場所を複数にすることで、どこからでも参加できるようにし、実際に2時間かけて歩いて来る方もおり、必要な人に届いていると実感している。

Q：小内委員

チラシは効果があったようだが、フードパントリーやドライブなどの言葉が馴染みにくい印象がある。名称や用語の工夫についての考えはあるか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

確かにわかりづらいという意見もあり、チラシでは「フードパントリーとは何か」の注釈を加えた。横文字のままでも活動内容を理解してもらえるよう、用語の意味を丁寧に伝えていくことが重要だと考えている。

Q：小内委員

活動が拡大し、食品の受取や配布が大変になっているように思う。今後、どのように限界を乗り越えていく予定か。

A：特定非営利活動法人恩おくり

今後は拠点での飲食事業等を通じて収益を得ることを検討している。また、認定NPO法人の取得を進めることで、寄付者側にもメリットを提供し、広く支援を募る体制を整えていきたい。

Q：小内委員

ボランティアの年齢層について教えてほしい。

A：特定非営利活動法人恩おくり

70代以上の方が多く、日常的な活動の場を求めて参加されている。中には週1回の活動では物足りず、もっと関わりたいという方もいる。

Q：会場

準備した食料が余ったケースや、逆に足りなくなったことはあったか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

6月・8月の拠点ではちょうどよい数だったが、天候や対象の限定などで来場が少なく余ることもあった。余った場合はその場にいた子どもたちや、民生委員を通じて困窮家庭に届けてもらうなどの対応を取った。

Q：会場

折り込み広告は効果があるが、費用もかかる。今後の広報方法についてはどう考えているか。

A：特定非営利活動法人恩おくり

補助金のおかげで実施できたが、自前では困難。今後はオンライン広報を強化したいが、紙媒体が有効な層も多いため、両立を図っていきたい。

【2】こども支援ワーカーズみんなのいえ

事業名：不登校児童居場所支援と地域でつなげる講演会

【事業内容】

・目的

全国で34万人、江別で300人以上、増加傾向にある不登校児童とその保護者が、学校に行けない時でも安心して過ごせる居場所を地域の中に設けること

・実施内容

◎居場所づくり「おおあさBASE」

週1回、火曜日10時から12時まで開所し、子どもは読書、勉強、ボードゲームなどをして自由に過ごし、保護者はお茶を飲みながら気持ちを話せる場とした。学童保育を行っている大麻銀座商店街の拠点を活用し、通しやすい立地の中で実施した。

年間39回実施され、延べ参加人数は児童28名、保護者29名、支援者13名の合計70名であった。

子どもたちはボードゲームや積み木遊びなどを楽しみ、保護者はお茶を飲みながら日々の悩みを語り合う場となった。

活動の中では、近隣の小学校の児童が朝に立ち寄ってスタッフと話をし、その後登校するという利用もあり、また中学生の参加も確認された。参加者の中には、学区外から親子で訪れるケースもあり、地元に限らず利用されている。室内には、一人になれるスペースを確保するなど、子どもや保護者の希望に応じた柔軟な対応を行った。また、来訪者の声を取り入れ、欲しいボードゲームをリクエストに応じて購入するなど、年度を通して段階的な環境整備を行った。

◎講演会

地域への発信と理解促進のため、企画・開催した。講師には、川崎こども夢パーク初代所長であり、認定NPO法人フリースペースえん理事長の西野博之氏を招き、10月20日に講演会を実施。参加者は46名のほり、当事者や保護者、支援者、教育関係者など多様な立場の人々が集まり、意見交換や情報共有がなされた。

西野氏の最新の著書の内容も交えながら、不登校の子どもたちや保護者の心理について理解を深める場となった。講演後の質問や意見交換も活発で、参加者にとって学びの多い機会となった。

【収支決算】

・収入

自己資金は、団体内のスタッフからの寄付等によって捻出された。

・支出

補助金による支出は約 127, 000 円

内訳は講師謝金、交通費、チラシ印刷代、保護者向けの飲み物・お茶代、ボードゲーム購入費等

【結果と考察】

＜おおあさBASEについて＞

活動を通して、学童を行っている場所でもあり、子どもと保護者が安心して過ごせる居場所を作ることができ、来所を繰り返すことで関係性を深めていき、他団体の支援やイベントへのつながりも実現できた。

地域に対しても、学校に行けない子どもたちが地域で過ごせる場の重要性について発信できた。大麻以外の地域から来る人もいた。

＜講演会について＞

支援団体や教育関係者とも交流が生まれ、不登校への理解が深まるとともに、地域内での支援連携の可能性が広がった。また、当日参加できなかった人にも思いを届ける仕組みや、講演後のつながりの継続が今後の課題

＜展望＞

今後は、当事者に限らずすべての保護者への情報発信を意識した広報、初めての人も参加しやすいイベント的な企画などを織り交ぜ、タイトルのつけ方や発信の仕方を考え、より開かれた活動として展開していくことを検討している。

◆質疑応答

Q：松山委員

ねくすと（江別市が開設した不登校支援拠点）との連携はあるか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ】

「ねくすと」の担当者には「おおあさ BASE」の情報を伝えており、「ねくすと」に関わる支援者の方が本団体の活動にも参加している。ただし、小学生は「ねくすと」に参加しづらい状況があり、お互いをつなげていくことの対応は今後の課題と捉えている。

Q：小内委員

西野氏の講演会は費用がかかるが、招致の成果についてどう評価しているか。また、聞けなかった人に対するフォローの方法は検討しているか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

講演内容は支援者にとっても大きな学びであり、参加者が西野氏の考えを共有することで団体としての支援の柱を確認する機会となった。この共有を広げていく必要もある。

Q：会場

講演会だけで終わらせず、今後のつながりをもつ仕組みができたか。

A：こども支援ワーカーズ みんなのいえ

仕組みを作ることが目的ではなかったため、仕組みを作ったということにはなっていないが、会場内での情報共有はあり、当事者が安心して参加できる配慮が必要であると感じた。情報が一括で共有されることに不安を感じる保護者もあり、つながりのあり方や仕組みは慎重に検討する必要があると認識している。

【3】NPO 法人つながり

事業名：親子パン教室

【事業概要】

・目的と目標

本事業は、子育てを家族だけで担う現代において、孤立しがちな保護者や家庭に対して、つながりを生み出す機会を提供すること。多くの母親が関心を持つパン作りをきっかけとして、親同士、子ども同士が自然に交流できる場を提供し、家庭の外に信頼できる関係性を築くことを目指した。1 回だけでの開催では交流は生まれにくいいため3 回の開催とした。

【実施内容】

・開催日

6月9日 テーマ：「クリームチーズ入りあんパン」と「チョコクリームパン」をフライパンで作る

8月4日 テーマ：トースターで焼く「ベーコンエピ」

10月20日 テーマ：トースターで焼く「コーンマヨパン」

パンが焼き上がるまでの間、子どもたちが遊べるよう、ママの夜会で使用しているおもちゃを持ち込む工夫を行った。

・会場

いずれも江別市総合社会福祉センター大広間

・講師及び定員

外部の専門家を招き、1 回につき 8 家族

・応募状況

参加者の定員には毎回達したが、体調不良等での欠席により、2 回目以降は若干名の欠席があり、7 家族づつとなった。

アンケート結果（住まい・年代）

開催日	6/9	8/4	10/20
住まい	大森新町 2 名 野幌 2 名 大森桜木町 札幌市厚別区 札幌市北区 岩見沢市	野幌 2 名 緑ヶ丘 大森新町 大森桜木町 岩見沢市 北広島市	野幌 2 名 大森新町 大森桜木町 札幌市厚別区 札幌市北区
年代	30代 4 名 40代 4 名	30代 4 名 40代 3 名	30代 4 件 40代 2 件

・住まい

江別市内が半数以上であったが、北広島市、岩見沢市、札幌市からの参加も見られた。

・年代

多くは 30～40 代の母親であったが、父親や祖母が参加したケースもあり、家族形態の多様性が確認された。

・参加動機

「子どもにパン作りを体験させたい」、「親子の思い出を作りたい」、「前回が楽しかったのでまた参加したい」など リピーターの存在も確認された。

【アンケート結果と考察】

おもちゃがあって良かった、パン作りの体験を親子で楽しめたという肯定的な感想が多数寄せられた。「家でも作ってみた」「帰宅後すぐ再現して家族に振る舞った」といった意見もあり、良い経験となり家庭での継続的な実践につながる効果も確認された。

【収支決算】

・収入

自己資金 23,697 円、参加費 11,000 円、協働のまちづくり支援事業補助金 67,000 円

・支出

講師謝金（3 回分）84,000 円、1 家族 3500 円の 8 家族、3 回の計算

会場使用料 11,850 円、印刷費、消耗品費、材料費等を含めた総額で、収入内に収まる形で実施

【結果と課題】

<成果>

本事業は、参加者同士が自然につながる場として有効に機能した。参加者同士が SNS でつながったり、団体の他事業（ママの夜会）に来るようになった親子も見られ、活動を通じた横の広がりが生まれた。

子育て支援団体の関係者も参加しており、自団体だけでなく他団体の活動にも波及する効果があった。親子での共同作業を通じて生まれる会話や協力は、子どもの成長や家庭の絆を深める上でも意義深いものであった。また、SNS 等を通じて参加者同士のつながりが継続されている点も、本事業の成果として挙げられる。

<課題>

参加希望が多く、毎回定員に達してキャンセル待ちが発生したことから、今後の実施方法についての再検討が必要である。講師の対応人数や安全面も考慮し、適正な規模を維持しつつ、より多くの家庭に機会を提供するために検討が必要になる。

また、特定のテーマで参加しやすくしたことにより、つながりに対するハードルが下がり、多様な家庭が参加できたという効果もあった。単なる「つながりを目的とした交流会」よりも、パンを作るなど具体的な体験活動を通じて自然につながる場の重要性が再認識された。今後も 1 人でも多くのお母さんがつながるきっかけになるよう活動していく。

◆質疑応答

Q：小内委員

3 回通して同じ家族の継続参加はあったか、また定員に達したということだが、継続参加の優先や居住地などの選考基準はあったのか。

A：特定非営利活動法人つながり

申込はすべて先着順で受け付けていたため、継続参加の家族もいたが、1 回のみの参加者も多かった。継続性を意識した事業であったが、その中でつながりを作っていく限界も感じたので、今後の課題としていく。

Q：松山委員

活動後、実際に参加者同士の関係が継続しているか。

A：特定非営利活動法人つながり

全部の家族、詳細までは把握できないが、ママの夜会に継続参加する保護者もあり、その後に個別に家庭同士での交流も生まれていることを確認している。一定のつながりが生まれていると感じている。

Q：会場

広報が十分でない印象があるのと、前回のママの夜会の延長とを感じるが、今後の発展性について考えていることはあるか。

A：特定非営利活動法人つながり

初回はチラシと SNS を同時に展開したが、SNS の利用だと江別外の方の申し込みも多いので、2 回目以降は紙媒体を先行させ、市内への掲示や配布後に SNS 投稿を行うなどの工夫を行った。より多くの市民に情報が届くよう今後も工夫を継続したい。今回のパン教室はママの夜会への参加された方の声により事業を企画した。声を聞きながら今後考えていきたい。

【4】えべつシェーネシュティンメン

事業名：えべつ Schöne Stimmen 演奏会「歌の花束」～小松英典教授門下生による声楽コンサート～

【事業概要】

・目的

1. 芸術音楽に日常的に触れる機会の少ない地域住民に向けて、歴史に残る声楽を広めるとともに、その素晴らしさを共有すること。
 2. 芸術音楽に馴染みのない方、遠方への外出が困難な方、子どもなどを含む広く一般市民を対象に広めること
- ホールから飛び出し地域に出向いて開催する形式とし、今回はのっぽろ幼稚園ホールにて演奏会を実施

【実施内容】

・演奏会の開催

日時：2024 年 7 月 21 日（日）午後 2 時から

会場：のっぽろ幼稚園ホール

来場者 68 名の来場者

・日程等について

小松先生の予定の都合で、この日しか設定できなく、のっぽろ幼稚園が唯一使用できる場所となったため、開催決定から時間もなかった。のっぽろ幼稚園ホールは、クリスチャンの教育機関として礼拝堂のようなホールで音響環境を有しており、非常に良質な響きの中での演奏となった。

・出演者及びプログラム

小松英典教授をはじめとする声楽の専門家・門下生およびピアニストで構成されており、ドイツ歌曲、オペラアリア、日本歌曲、さらに「千の風になって」「川の流れのように」など馴染みある曲も織り交ぜたプログラムで構成した。

・来場者の反応

「心に響いた」「涙が出た」「また聴きたい」などの感想が寄せられ、会場内では終了後に初対面同士が感想を語り合う姿も見られ、次回もまた来たいという声も多数聞かれた。

【収支決算】

・収入

自己資金 468,979 円、江別市の補助金 45,000 円

入場料（3000 円×69 枚）207,000 円

・支出

報償費（演奏者への謝礼）を中心に、交通費（出演者の移動費）、宿泊費（複数名分）、賃借料（レンタルカー）、印刷費（プログラムはお手製で無料）、その他会議費と受付等協力者への謝礼等で構成されている。東京からの出演者が多く、一定の交通・宿泊費が必要となった。

【結果と考察】

参加者からは「今度はホールで聴きたい」「次回も必ず来たい」との声が多く寄せられ、演奏者の技術と芸術性が聴衆の心を打ったことがうかがえた。演奏を通じて地域の中に会話と笑顔が生まれ、芸術音楽の持つ力が地域活性化の一端を担った。また、出演者の一人である城守香氏の演奏に涙する来場者もあり、音楽の力が感情に強く訴えかけたことが印象的であった。

団体としては、今回の経験をもとに「歌の花束」シリーズとしての継続開催を計画しており、地域に飛び出して行う取り組みとして、ピアノのある喫茶店で 1 回行った。その時は、遠くに出かけられない高齢者が多く来られた。また、会としては 12 月 1 日にはえぼあホールでのクリスマス・オラトリオ演奏も実施した。

【反省点と課題】

<反省点>

今回の演奏会は会場確保が非常に難航し、開催決定から本番までの期間が短かったため、広報活動が不十分であった。

<検討課題>

演奏準備にかかる運営面のあわただしさ

<展望>

地域に根差した芸術音楽の普及を目指すには、早期の会場確保と広報準備、参加者に情報を届ける手段の強化が必要である。今後は、喫茶店で行ったような子どもや高齢者など外出が困難な人にも音楽を届ける「地域出張型演奏」の機会を拡げたいと考えている。

◆質疑応答

コメント：松山委員

たくさん出演者もいて、準備期間が短かったとのことで広報期間が少なく、非常にもったいない。このような機会があればしっかりと広報してほしい。

A：えべつシェーネシュティンメン

開催直前まで会場確定が遅れたため、十分な周知ができなかった。

Q：小内委員

普段コンサートに来られない層が来場されていたのか。

A：えべつシェーネシュティンメン

会場では「初めてこうした音楽を聴いた」「今度はホールで聴きたい」という方も多く、聴衆の層に新たな広がりを感じた。次回はさらに開かれた形で地域の多様な人々に届けたい。

Q：小内委員

先ほどの話を聞いて、これまでもホールから出て発表会を行っていたのか。また、チケット 3,000 円は破格ではないか。

A：えべつシェーネシュティンメン

その場合は、小松先生はお呼びせず、私たちだけで拙いが歌を聴いてもらった。

小松英典教授はドイツで一番上の 5 段階目の終身教授の称号を持ち、ドイツリーの第一人者である。東京などでは 6,000～7,000 円の相場だが、北海道価格として 3,000 円に設定した。

Q：会場

コンサートイベントが多数ある中で、このような一つのコンサートが、協働のまちづくり支援事業に該当するか疑問である。

A：シェーネシュティンメン

私たちは芸術音楽の持つ力で地域を豊かにし、人々に喜びを届け、幸せになってくれることを念じて活動している。市民の多くの方に聴いてもらいたいと思い、協働のまちづくり活動支援事業に応募した。

コメント：小内委員

芸術分野でも地域に貢献できると考える。今回の事業は普段ホールで行っていることを、地域に出て 1 幼稚園で行い、身近に感じてもらい、聴いてもらうことが主旨だと考える。

A：えべつシェーネシュティンメン

初めて聴く音楽に触れ、心が豊かになる事で地域を活性化出来たのではないかと考える。中々遠くに出かけられない高齢者にも届く演奏を行うことで貢献していると考えている。

コメント：松山委員

芸術に触れることの喜びを地域に出ることで、小さいお子さんや高齢者の方も参加できる活動は非常に大切に思う。何かを知る、学ぶ、それは芸術でも日常生活でも、新しいことを知る喜びに繋がっていくのだと思う。

【5】江別市女性団体協議会

事業名：おもちゃ図書館 地域食堂

【事業概要】

・目的等

本事業は、世代を超えて高齢者と子どもたちが交流できる場がまだまだ不足しているという課題を受け、地域食堂を通じた多世代の居場所づくりを実施。協議会が長年運営している「おもちゃ図書館」の活動を基盤とし、絵本やおもちゃの活用に加え、子育て経験のあるボランティアスタッフの協力により、実施が可能となった。

【実施内容】

・8月24日（土）「レジャーライブラリー」旧町村農場

今までにない、多くの来場者約200名を迎え、中庭やキッズスペースを活用したおもちゃ遊び、絵本の読み聞かせ、縁日企画、地域食堂（カレーの提供）などを実施した。特に紙芝居や読み聞かせコーナーは人気を博し、子育て世代の保護者や高齢者、障がい者の家族など、多様な層が参加し、賑わいを見せた。

旧町村農場の開催について、選考会時に委員から障がい者の配慮についてはどうなのかという質問を受けたが、会員の参加は多くはなかったが、会員だったメンバーが高校生になり、お手伝いとして来てくれたり新たに出来た事もあった。

・12月7日（土）「クリスマス会」江別市総合社会福祉センター

146名の来場者を迎え、「語り芝居ぐるーぷうるうる亭」の演劇とエプロンシアター、工作コーナー、マツケンサンバをみんなで踊ったり、地域食堂（カレー提供）を実施した。旧町村農場で来場されたりピーターの参加も見られた。

クリスマス会で実施したアンケートにおいては、地域食堂について「毎月開催してほしい」「とても良かった」などの好意的な回答が多数寄せられた。

※予定していた9月14日の回は他事業との日程重複のため中止

・対象：地域の高齢者、子育て中のお母さん、お父さん、子ども

【収支決算】

・収入 計202,846円

自己資金100,386円、協働のまちづくり支援事業補助金68,000円、

イベント収益（参加費等）34,460円

・支出 計222,046円

報償費16,700円、旅費4,200円、印刷製本費12,154円、役務費19,375円、消耗品費72,630円、食料費55,147円、備品購入費として炊飯器等

【結果と考察】

本事業を通して、旧町村農場という地域資源を活用した交流の場が確立されたことで、子育て中の保護者、高齢者、障がい者など多様な人々が安心して参加できる場を提供することができた。また、放課後の子どもの居場所不足について保護者からの声が寄せられたことを受け、各校区にこのような場があ

ることが必要であると感じ、2 月に開催されたふれあい懇談会にて、市長に対して現状をご報告させていただいた。

<展望：今年度（令和7年度）について>

6 月 14 日に旧町村農場でレジャーライブラリーを、12 月 6 日に江別市総合社会福祉センターでクリスマス会を開催予定としており、周知に関してもまんまる新聞、北海道新聞、回覧などで啓発し、引き続き多世代が集う地域拠点としての発展を目指す。

◆質疑応答

Q：小内委員

説明の中の会員とは、どのような人々を指すのか。

A：江別市女性団体協議会

江別市女性団体協議会内にある「おもちゃ図書館」の会員を指しており、主に障がいのある方やその支援に関わる人々が中心である。

Q：小内委員

本事業の実質的な運営は誰が担っているのか。

A：江別市女性団体協議会

おもちゃ図書館のボランティア委員が中心となって運営しており、現在約 20 名のメンバーが活動している。

Q：小内委員

ボランティアは無償なのか。継続への負担にならないか。

A：江別市女性団体協議会

基本的には無償であるが、おもちゃ図書館の部分としては、市の支援も受けており、その中から準備についてはボランティア交通費として 1 回 400 円を支給している。また、今回の助成の交通費 4200 円の支出は、お手伝いいただいた元会員や元利用者 3 名に行った。

コメント：松山委員

元会員など、手伝いをしてくれた方にきちんと交通費を支給していることは素晴らしいと思う、体につけて今後も頑張ってもらいたい。

コメント：会場

旧町村農場を上手く活用してくれていることは非常にありがたい。

A：江別市女性団体協議会

今年度も 6 月と 12 月に開催を予定しており、内容をさらに充実させていきたい。

Q：小内委員

宣伝をしすぎることによって参加者が集中しすぎる懸念はないか。

A：江別市女性団体協議会

前はカレーライスやご飯が足りなくなるほどの盛況であった。今回は 200 食を用意するなどの対応を検討しており、来場者が楽しめるよう、ミニ運動会やスタンプラリーを使った宝探しなどの新しい企画も盛り込む予定である。江別を盛り上げるイベントにしていきたい。

【6】子育て支援ワークスきらきら

事業名：多世代交流「食育サロン e-たいむ」（補食編）

【事業概要】

・目的

1. これまで継続的に開催してきた「多世代交流サロン e-たいむ」に、子ども向けの補食（おやつ）の提供と食育講座を加えた「補食編」として発展的に実施
2. 安易に市販のお菓자에偏りがちな子どものおやつを低年齢のうちから与えている事について懸念しており、補食としての役割を正しく理解し、家庭で無理なく楽しく実践できる手作りの工夫を伝えること

・会場

錦町の新栄会館

・開催日程

2024 年7 月から2025 年3 月まで毎月1 回（基本的に第3水曜日）、加えて夏休みの特別回（イベントとして11 月4 日（月・祝））を含む全10 回を開催

【実施内容】

・広報

同じ場所で月曜日に開催している親子広場、「ぽこ あ ぽこ」隣接の託児ルーム、新栄会館の各棟への配布、SNS での発信、社協などへの配布

・開催当日の様子

参加者に手作りおやつを提供しながら、そのおやつに関する食育ミニ講座を実施した。講師は地域の方を招き、親しみやすい雰囲気の中で、簡単で栄養価の高いレシピの紹介や調理法の工夫を紹介した。毎回の講座ではラミネートを施したレシピを配布し、参加者が家庭でも再現しやすいよう配慮し、毎回参加するとレシピ集が出来上がるように工夫した。

・参加者

主に未就学児の親子であるが、長期休暇時には小学生の来場もあり、また大人のための参加者も見られ、多世代交流の場となった。親子ひろば「ぽこ あ ぽこ」や隣接する託児ルームなどとも連携を図り、地域とのつながりを活かした運営を行った。

【事業効果】

参加者アンケートでは、「補食についてもっと知りたい」「レシピをもっと教えて欲しい」「自分でも作れると思った」などの声が寄せられ、食に積極的に興味をもってくれた。また、配布したレシピを家庭で再現する例もあり、継続的な実践につながる成果が確認された。

活動を通じて、自治会等からの出前講座依頼や、広場の片付けへの協力申し出など、新たな地域連携も生まれた。子育て世代にとって気軽に相談できる場所としての意義も大きかった。

【収支決算】

・収入 計 148,568 円

構成：協働のまちづくり支援事業補助金、参加費、自己資金

・支出

講師謝金、材料費、印刷製本費、会場使用料、消耗品費、役務費等

【結果と考察】

簡単で栄養価が高く、経済的な手作りおやつを紹介は、子育て世代を中心に多くの方に興味をもってもらえ、ママと子どものためと思い始めたが、親子の参加者も大人だけの参加者も増えたことから、食というテーマは皆さん興味のあることと改めて感じた。また、イベントでは「簡単に作れる」「家庭で続けたい」との声が多く、継続性のある活動であったことがわかった。

ママ達がゆっくり出来るようボランティアスタッフの確保にも努めた。

【今後の展望と課題】

e-たいむを増やして欲しいとの要望に応え、開催日数の増加（年 11 回へ）と情報発信については、チラシを早めに作ったり、SNS の更新を多くしたり、お会いする方にマメにお知らせすることに努めていく。レシピの公開についても、まだまだストックがあるので長く続けていきたい。

◆質疑応答

コメント：松山委員

手作りのおやつレシピは非常に大切な事で評価できる、これからもレシピを増やして欲しい。

Q：小内委員

継続して参加する方は多かったか。

A：子育て支援ワーカーズきらきら

継続参加の方も多く、ママ友繋がりや友人を誘って来るなどで増えていった。

Q：小内委員

地域は野幌が多いのか。

A：子育て支援ワーカーズきらきら

新栄会館周辺からの参加が多かったが、江別市内全体からの参加があった。

Q：小内委員

レシピの公開について考えはあるか。

A：子育て支援ワーカーズきらきら

SNS での発信はしているが頻度は少なかったのもっと発信するようにしたい。

案：会場

働く保護者も多い中で、作り置きができるようなレシピの普及も大切では。

A：子育て支援ワーカーズきらきら

実際に食べてもらうことで「簡単にできる」「家でも作れる」と思える体験が重要と考え実施している。今後も続けていきたい。

【7】江別市男女共同参画推進連絡協議会

事業名：男女共同参画キャッチフレーズ募集と若年層への啓発

【事業概要】

・目的

若年層に向けた男女共同参画の啓発活動として、市内中学 1 年生を対象にキャッチフレーズを募集し、男女共同参画について自ら考える機会を提供すること

・きっかけ

苫小牧市においてデート DV の出前講座が全中学校で行われていると知ったことで、江別市でも若年層に対する意識啓発や若年層の考えを聞く必要性を強く感じたことによる。これまで協議会では大人向けの活動を中心に展開してきたが、本事業では初めて中学生という若年層に焦点を当てた。

【実施内容】

市内の中学 1 年生を対象に、夏休み前に応募用紙を配布し、キャッチフレーズの募集を行った。当初は夏休み明けを予定していたが、校長会の助言・協力により夏休みの課題として取り組む形となった。

最終的に想定以上となる 332 通の応募があり、協議会内の選考委員会にて 10 作品を選定。11 月に開催された「さんかくまつり」において入賞者を表彰し、図書券を贈呈した。そこで来場された皆様にお知らせし、また、入賞作品は協議会ニュース「ぱーとなぁ」2 月号に掲載し、市民への広報にも努めた。

【事業効果】

当初の予想を超える応募があり、若者が男女共同参画について真剣に考えるきっかけとなった。中学 1 年生にとっては教科書にも未掲載の内容であるが、各学校が補足説明を加えながら協力して取り組んでくれたことも大きな成果である。

また、情報誌への掲載に加え、別事業にはなるが 1100 枚のクリアファイルを作成して全中学校に配布するなど、視覚的にも訴える啓発活動を行った。協議会としても、若者の声を今後の活動に反映する契機となった。

【収支決算】

・収入 計 36,620 円

自己資金 19,620 円、補助金 17,000 円

・支出 収入と同額

会場使用料、印刷製本費、図書券費用等

【今後の展望と課題】

協議会の会報誌やパネル展示など、今回のキャッチフレーズを活用していきたい。

◆質疑応答

Q：松山委員

情報誌に掲載されたキャッチフレーズに学校名などを明記した方が、応募した生徒や学校にとっても誇らしく感じられるのではないかと。

A：江別市男女共同参画推進連絡協議会

協議会内でも学校名を記載するかどうか協議した協議した。今回はキャッチフレーズに掲載しているが、次回からは、注釈などの形で学校名が伝わる工夫を検討していきたい。

コメント：松山委員

配布資料の予算部分、緑地に黒字は見づらいと感じた。白字の方が高齢者にも見やすいのではないかと。

A：江別市男女共同参画推進連絡協議会

ご指摘を踏まえ、今後は見やすさにも配慮したレイアウトとしたい。

Q：小内委員

大人への広報も重要ではないかと。「広報えべつ」などへの掲載も検討してはどうか。また、継続性についての考えを伺いたい。

A：江別市男女共同参画推進連絡協議会

今後も若者の声を活かした啓発活動を継続したいが、予算の都合上、全中学校を対象とした取り組みは難しいことが予想されるため、学校を分けて毎年実施するなどの工夫を検討している。

また、情報誌「ぱーとなぁ」への掲載だけでなく、市広報誌への掲載や研修会でのパネル展示など、より多くの市民に周知していく。

コメント：会場

PTA やコミュニティ・スクールなど地域の団体もあるので協力しながら学校に働きかけていきたいと感じた。

A：江別市男女共同参画推進連絡協議会

自分だけの団体だと限られた活動になってしまうので、活動を広げるという視点では、一緒に活動出来れば拡がりや効果が倍増すると感じている。今後は連携を強化していきたい。

■コメンテーターの総評

松山委員

今回報告のあった 7 団体のうち、4 つが食に関わるものであったことが印象的であった。食事の内容や、誰と食べるかといった日常の行動を通じて、人と人とのつながりが深まり、地域の関係性や豊かさが育まれていることを実感した。中でも、「子育て支援ワーカーズきらきら」のように、手作りおやつに特化した活動は非常に印象的であり、経済的負担軽減の視点や家庭での実践に結びつける工夫が随所に見られた。

人と人との結びつきから「この地で暮らして良かった」と思える気持ちが生まれ、暮らしの中に喜びが増えることが、市民活動の原点であり、力だと改めて感じた。

今後も健康に留意しながら、地道な活動を継続してほしい。それはやがて、活動した本人に経験や思い出として還ってくるものであり、積み重ねたものが実を結ぶ瞬間が必ず訪れると信じている。

貴重な体験を共有してくれたことに感謝するとともに、今後の活動の継続と発展を心から願っている。

小内委員

各団体の報告を通じて、行きづらさを抱える人々や次の世代に対し、居場所やつながりを提供しようとする真摯な姿勢が伝わってきた。報酬を求めずにまちづくりに取り組む姿勢には、深い敬意を表したい。同時に、思いつきや一過性の活動に終わらず、長期的に継続できる基盤や仕組みを意識してほしいとも感じた。

また、町内会活動に関する別地域での経験から、地域活動の場面では男女の関与に偏りが見られることも実感している。とりわけ女性がネットワーク型の活動に強みを持っている一方で、男性の関与が少ないことは課題ともいえる。その中で、例えば「NPO 法人つながり」のような存在が非常に心強く感じられた。まちづくりにおいても、男女問わず参加できる環境や意識が広がっていくことが望ましい。

市側からも制度をより使いやすくしていくとの発言があったように、今後さらに多様な市民が協働のまちづくりに参画できるような環境整備と、市民活動の一層の盛り上がりを期待している。